



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	マックス・シュティルナーの近代合理主義批判（8）
Author(s)	住吉, 雅美; SUMIYOSHI, Masami
Citation	北大法学論集, 44(6), 309-337
Issue Date	1994-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/15561
Type	departmental bulletin paper
File Information	44(6)_p309-337.pdf



マックス・シュテイルナーの近代合理主義批判（八）

住 吉 雅 美

目 次

はじめに

第一章 ドイツ的自律の形成過程——シュテイルナー前史——

第二章 シュテイルナーにおける自律思想の改革

(四二卷二号)
(四二卷三、六号、四三卷二号)

第三章 シュテイルナーと「闘争」

第一節 《反・近代》の視座としての Eigner

(四三卷四号、五号)

第二節 唯一者——創造的主体性の新たな可能性として——

(四三卷六号)

第三節 《シュテイルナー・ショットク》の射程

(以上本号)

第四章 唯一者の政治論

おわりに シュテイルナーと現代

第三節 《シュテイルナー・ショック》の射程

政治社会から、主権国家と市民社会への分裂が顕在化しはじめた一八四〇年代半ばにあつて、シュテイルナーの『唯一者とその所有』は、人心が今や国家や様々な政治的立場が掲げる理念によりも自己の私的な関心の方により一層引き付けられているという現実を、鋭く看取しえぐり出すものだった。同じく国家―社会、精神―物質が主―奴的対立状態にあることを感じていた論者たちにとって、この著作は、もはや人々の心情を拘束しえぬものとなりつつある精神的普遍性を完全排除するか、あるいは敢えてその回復を試みるか、このいずれの方向をとるべきかという二者択一を迫るものであつた。

唯一者論の意義は、感性的特殊性をロゴスの普遍性に昇華させるヘーゲル思弁哲学の魔術性を、フォイエルバッハ以上に徹底して暴いたという点にある。論客たちは、シュテイルナーによつて仮借なくあらわにされた感性的・個別的実存がそのままでは普遍性と折り合えぬものであることを否応なく承認せざるをえず、その上で新たに、実在的なレベルで個―類の一体性を理論づけるか、もしくは精神的たるにとどまる政治を棚上げした上で社会に固有の哲学の構築に取り掛かるかしなければならなかつた。

第一款 『唯一者とその所有』の波紋

エンゲルスはシュテイルナーの『唯一者』の見本刷りを、比較的是やいうちに読んだらしい。彼は読了後直ちに、当

時パリにいたマルクス宛の手紙の中で、『唯一者』について好意的な評価を与えている。エンゲルスは、シュティルナーの唯一者のエゴイズムを言葉の通常の意味での利己主義と解し、ブルジョア支配の現実のイデオロギー的表現を最もあらわに体现するものではあるが、しかしそれゆえにこそ、あと一步でその止揚である共産主義へと必然的に転換せざるをえないであろうと述べる。彼によると、利己主義は、そもそも抽象的・普遍的な概念からではなく、身体髪膚備えた生身の個人の感性的実存から率直に主張されるものであるだけに、ブルジョア支配の自己矛盾がそこで自覚されるやいなや、利己主義者こそが率先して現体制の自壊を促進し、自己の利益に真に見合った共産主義への道を理性的に選択するだろうとされる、「利己主義によって（我々は）共産主義者なのであり、利己主義によって単なる個人ではなく人間であろうと欲するのだ」⁽¹²⁹⁾。

しかしこうして唯一者と等置された「利己主義」は、エンゲルスによってさらにベンサム功利主義と同一のものと考えられていた。シュティルナーは、唯一者は他者と「有用・効用・利益」の一面的な関係をしかもちえないと述べているが、その点にふれてエンゲルスは手紙の中で、それは「ベンサムの功利主義を一面でより徹底化し、他面でより不徹底にしたものである」と評している。⁽¹³⁰⁾ 周知の通りベンサムは、個人の功利即ち「利己的個人の『打算的な態度と計算高い心情』」を出発点としながら、それによって実現された各人の快苦を計算可能なものとみることによって、個人の利己性を社会全体の公共的効用に連関させた。⁽¹³¹⁾ だがこのような功利主義の一例としてシュティルナーの唯一者論を評価することは、いくつかの理由から困難である。まず第一に、唯一者論には前述の功利主義のような、社会全体の公共的効用への配慮は毛頭見あたらない。少なくともそれを明言してはいない。逆に彼がイメージするのは、絆をもたないアトム的な唯一者同士の所有をめぐる、『公共善というゴール』なき果てしない闘争の光景であった。彼はいう、「所有の問題は、……万人に対する万人の闘争によってしか解決されない。貧者は、—— 反逆し、立ち上がり、蜂起することに

よつてのみ所有者となりうる」(EE288. 一五八頁⁽¹³⁾)。

むしろ、ベンサムもその後継者の一人とされる「アダム・スミス問題」——利己的な経済主体の主観的な意図に反して社会的公共善が実現されるという近代市民社会のパラドックス(山之内靖)——そのものを、唯一者の仮借なきエゴイズムは打ち消しているようにみえる。あるいはそのようなことはそもそも、彼の視野には皆無であったといつてもよい。なぜなら前述の通り、シュティルナーの唯一者は、前市民社会的(中世的な)パラダイムに立脚するものだからである。したがって彼のいう「一面的な関係」(EE288. 下二三八頁)は、はじめから普遍的契機をもちえない。その意味では、スミス問題を受けとめた一人であるヘーゲルにおけるシトワヤンの「有用性」⁽¹³⁾以前の段階のものでもある。唯一者のエゴイズムは、公共善を導くどころか、個体主義によって安定的なゲマインシャフトを根拠付けようとする個——全体性の擬制を、意図的に退けようとする戦略の一環である。そこで意図されることが一体何であるのかということ、次節に論じられることになるが、さしあたりここでは、エンゲルスはシュティルナーを、なおも一つの安定的なゲマインシャフト論たりうる可能性を秘めたものとして評価しようとしている点で、すでに誤っていることが指摘されたりよう。

以上の誤解にもかかわらず、エンゲルスによるシュティルナー評価において注目されるべき点は、彼がシュティルナーに接することによって、思弁哲学において長らく顧られることになかった現象としての個体的実存の問題への関心を惹起されたことである。エンゲルスにとってシュティルナーのエゴイストは、生身の個体的自我のみをよりどころとするがゆえに、「個別性」における「経験論と唯物論」の立場を体现する最もすぐれたサンプルであった。彼はシュティルナーこそが、実在するとされる概念に個別性やその感覚的直接性を昇華させるヘーゲルの思弁の魔術の、全き対極にたちうる論客であると評価していたのである。⁽¹³⁾ エンゲルスは、自身確かに生粹のヘーゲリアンとして、かつて本質に対する実

存の復権を説いたシエリングを⁽¹³⁵⁾一蹴する論文を書いたこともあったが、やがてフォイエルバッハ哲学の影響を受け、感性的実存を見直す方向に向かいつつあった。⁽¹³⁶⁾シュティルナーはちょうどこのような時期のエンゲルスにはからずも知的な刺激を与え、個体的主観性と感性的直接性として捉えられた実存それ自体を考察の対象とすることが不可避であることを痛感させたのである。⁽¹³⁷⁾

「我々は、自我から、つまり経験的な生身の個人から出発して、シュティルナーのようにそこで立ち往生していないで、そこから我々を『人間』にまで高めなければならぬ」⁽¹³⁸⁾

こうしてエンゲルスは、そのわずか前(一八四四年五月)にマルクスと共に著した『聖家族』の中で述べられた、「唯心論と唯物論との、『人間』における止揚統一」というフォイエルバッハ的図式からの脱却の契機を、シュティルナーのうちに見いだしたのであった。⁽¹³⁹⁾

しかし、エンゲルスのこのような理解は、名宛人のマルクスには全く共有されなかった模様である。エンゲルスは、マルクスのシュティルナーに対する、予想外の芳しからざる反応に、やがて自らの評価をも修正している。⁽¹⁴⁰⁾マルクスのシュティルナー評は、エンゲルスの手紙によれば、当時はむしろヘスのそれと一致していたらしい。ヘスのシュティルナー評は、一八四五年一月に書き上げられ、同年五月に刊行された『最後の哲学者たち』⁽¹⁴¹⁾と題する小冊子にまとめられている。ヘスは同書の中で、シュティルナーの立場を、地上の天国、国家公民という亡霊の棲まう国家に対置された「精神なき唯物論」たる市民社会の理論であると性格づけている。ここで考えられている市民社会とはヘスによると、自由競争と人権の名目のもとに孤立した個人同志が互いに互いを搾取しあっている社会である。ヘスは要するに「欲求の体系」としての市民社会を実際より一層脱政治的かつ脱倫理的なものと描いた上で、それを諸々の利己的私人の物質的利益追求の織りなす体系として、いささか露骨的に捉え返しているのである。ヘスはシュティルナーが、本来ならば理性

的にゲマインシャフトを形成維持しうるはずの人間にかの一面的關係を咬すことよつて、人間をやめて「野獣になれ！」と命ずる悪しき現実的エゴイズムを唱えているのだ、と断定する。しかし尙のシュティルナーは、このようにヘスのなした露悪的商業生活としての市民社会とエゴイズムとの混同を、その反批判のなかで厳しく退けている。いわく、商業生活もやはり物欲が神聖化され、そのために神聖な仕方であつて営まれている生活であり、それが一般に行われている市民社会は、自分のいうところのエゴイズムの住処ではない、エゴイズムの主張とヘーゲルのカテゴリーとは無關係である、と(KS391)。シュティルナーの反批判をまつまでもなく、すでに『唯一者』のなかで、物欲の徒はこれもまたひとつの「愚かれた者」であるがゆゑに、「聖なるもの」の完全廢棄をめざすエゴイストにとつてはやはり否定さるべきものであると述べられていた。シュティルナーのエゴイズムは、物質的欲求や経済的利益など既成的で具体的な内容とは全く切り離されて考えられなければならない。これについても詳細にはやはり次節に論じられるが、ヘス、そしてその影響を受けたマルクスのシュティルナー理解が元々不十分なものであつたことに留意されねばならない。

マルクスとて、「人間」存在をめぐる実存と本質の問題に全く無関心であつたわけではない。ただ彼の場合、その見をエンゲルスのようにシュティルナーに負つていたのではなかつた。マルクスのルーツは、むしろヘスであつた。

『経哲草稿』の序文にも述べられているように、マルクスは『一ボーゲン』誌に掲載されたヘスの諸論文（「行為の哲学」・「貨幣体論」・「一にして全なる自由」）に觸発されたことから国民経済学批判に着手したのであるが、中でも「貨幣体論」における、類的存在としての人間の社会的協働に基づく生産的生命活動（これをヘスは交通 *Verkehr* と呼ぶ）の等式を受け継ぎ、そのうえでかの「疎外された労働」の分析を展開している。こうして彼は、抽象的な人間像である類的存在の概念を、「生命活動の様式」、「生産的生活」という実在的で客観的な条件に轉換させたのであつた。⁽¹⁴⁾ それに伴い、それまで彼もまたほぼ襲用していたフォイエルバッハ的なヘーゲル左派の共通了解——「類的存在」への、実存

と本質との一致の仮託——に対する構えにも変化が生じてくることになるのであるが、それについてはすでに前章第二節にふれられた通りである。

マルクスは、パリを追われ、資本主義経済研究のためのイギリス滞在を終えた一八四五年の晩夏、同年一月に執筆契約をとりかわしていた著述の履行を急遽延期し、新たに別の著述に着手した。それは、すでに予定されていたいわゆる青年ヘーゲル派への論駁の小冊子『ライプツィヒ公会議』に加えてさらに、前年暮れの『唯一者』の著者シュティルナーに対する反論を展開しようとするものであった。彼は、『ドイツ・イデオロギー』の序文に述べられているように、「狼を自認し世間でもそう思われている羊ども」である青年ヘーゲル派（フォイエエルバッハ、バウアー、シュティルナー）の「化けの皮をはぐ」こと、つまりこれらの哲学がいずれも「現実のドイツの状態のお粗末さを反映しているにすぎない」という有様を示すこと⁽¹⁶⁾を刻下の急務として選んだのである。このような仕事を経済学批判に先んじてなされねばならなかった訳は、マルクスが後に（一八四六年一月一日付の手紙）述懐するところによると、経済学研究における自らの積極的發展をはかる前に、「ドイツ哲学やこれまでのドイツ社会主義に対する論争の書を先に出し、……これまでのドイツ科学に真正面から対立する私の経済学の立場に一般読者の目を向けさせ⁽¹⁶⁾る必要があったからであった。形成されつつあったマルクスの経済学上の見解は、最初から、彼の哲学上の見解を特定の具体的な知識部門で一層発展させ、適用したものであるに他ならなかった。それゆえ、彼の国民経済学批判の前に、その前哨としての哲学批判が、いわば露払いとして登場すべきであったとしても、不思議はなかった。

ところで、かの『ドイツ・イデオロギー』における青年ヘーゲル派掃討の作業の中でも、シュティルナーに向けられた論駁の部分である「聖マックス」は、群を抜いて膨大かつ執拗である。確かに『唯一者』が『ドイツ・イデオロギー』の書かれるモチベーションの一つであったことは明らかであるとはいえ、その激しさはいかなる事情によるものであ

ったのか。

『唯一者』の公刊が当時のヘーゲル左派周辺の論者たちに及ぼした効果は顕著なものであった。まず、かつてのマルクスの同盟者であったルーゲが、直ちにシュテイルナーを「具体的な生ける個人を救い出すべく、これまで彼を隷従させてきた抽象的普遍性を打倒した、ドイツの『理論的解放者』(ナウエルクとヘス宛の手紙)と賞賛し、自身もまたシュテイルナーに倣い、社会、平等、人間性といった観念を放棄するに至った。ルーゲばかりでなく、左派の中間派に属する論客であったグスタフ・ユリウスなる人物も、一八四五年のヴィーガント季刊誌第二号に発表した論文⁽¹⁴⁷⁾のなかで明らかにシュテイルナーに鼓吹され、「ユダヤ人問題によせて」のマルクスは基本的にフォイエルバッハの追隨者として類一個の二元論に陥っているから、いまだに宗教的疎外のバースペクティヴに捕らわれたままで実現不可能な地上の天国(可視的教会)のイメージを展望している、と攻撃している。また、第二章で示されたようにシュテイルナーの思想形成に大きな影響を与えたB・パウアー自身が、今度は逆にその申し子に触発されるかのごとくに、同年のヴィーガント季刊誌第三号において自らシュテイルナーの視点をそっくり借用しながら、当代ドイツの社会主義者、ヘス、マルクス、エンゲルスを総じてフォイエルバッハの追隨者と断している。⁽¹⁴⁸⁾《シュテイルナー効果》の特徴とは、このようにフォイエルバッハ的な個と類との統一理論への仮借なき別決の射程が、当時類的存在としての人間による社会の創設をほぼ共通の旗印としていた共産主義・社会主義の先端にたつ論者であったマルクス、エンゲルス、ヘスまでに及んだという点にこそあるものといえる。このことはマルクスらの立場からすれば、フォイエルバッハ批判を枕に、心外にも自分たちが攻撃の矢面にたたされたようなものであった。彼らにとつては、⁽¹⁴⁹⁾「社会主義者の唱える道徳性とは、まるで使徒信経のごとくにうさんくさい」との印象を巷間にひろめたシュテイルナーこそこれらの攻撃の元凶であり、また決定的な論敵であると映ったのであろう。同時に、マルクス、エンゲルスはここに、自分たちの唱える社会主義ないし共産主

義論を支えてきた疎外論的なブルジョア体制批判を、以後はもはや「人間」概念の擬制に定位する抽象的思弁に依存せず、に再構成する必要に迫られたのである。かくして一八四五年、シュティルナー攻撃のための長大な部分を擁した『ドイツ・イデオロギー』が執筆された。

第二款 『唯一者』と『ドイツ・イデオロギー』——争点——

第一項 シュティルナー批判の要点

マルクス、エンゲルスの共著『ドイツ・イデオロギー』から、総論的な第一篇「フォイエエルバッハ」ならびにかの膨大な「聖マックス」において繰り返し展開されている共産主義革命論の要旨、およびそれにおけるシュティルナーの反逆論の位置づけと批判のポイントを、以下に集約してみよう。

〔1〕

マルクス、エンゲルスにとって共産主義革命とは、一言でいえば分業の廃止である。ブルジョア諸関係にあつて分業とは、その内部において特定の発展段階における生産様式や協働の様式に対応した生産諸関係、総じて実在する社会的諸関係に、自立的で不動のものとしての外観を与える。それだからこそ、現下の市民社会の内部で生計を営む諸個人に、生産力と交通形態とが現実陥っている矛盾が容易に認識されないのである。今日の交通形態の基礎をなす、今や世界的規模のものにまで発展しているブルジョア階級の関係態が、分業を介して諸個人に対し疎遠な自立的威力として吃立しており、そのゆえ諸個人は階級に下属させられ、自らの生活諸条件、生活上の地位およびそれに伴う人格的發展の可能性をことごとくそれに負わざるをえない。こうして分業を介して硬直化された階級的個人としての立場が、各人に特

定の排他的活動領域をしか与えず、あたかもプロクルテスの寝台のように彼の存在を、その意志や動向をも含めて偏奇で一面的なものとなす。

唯一者はマルクス、エンゲルスによつて、ちょうどこの偏奇で一面的にされた個人の立場に位置づけられる。ここに唯一者批判のまず第一点が示される。彼らによると、唯一者をかくあらしめる唯一無二の固有性云々といったものは、個人が、先代において蓄積されてきた生産諸力に依拠しつつ物象化した交通形態に下属せしめられ、自立化したそのメカニズムによつて辛うじて許される偶然的な生活条件の享受以外の何物でもない。それゆえ彼らはいふ、「(シュティルナーは・筆者註) 現存の諸関係によつて個人が身体的、知的、社会的に陥っている不具化と隷属化とを、この個人の個性および固有性として認容するのである」⁽¹⁵⁾、と。

[2]

マルクス、エンゲルスは、フォイエルバッハやバウアーの鍵概念たる「類」に対しては、それが思考より産出された抽象物であつて、事実上の多様性を一切「超越」したものである点を攻撃していたのであるが、他方シュティルナーの唯一者に対しては次のように難ずる。いわく、「唯一者」は、ひとりひとりの(例えばシュティルナーなる)《生身の個人》という内容を与えられて具象化されるが、その生身のシュティルナーその人とは、「世の事情」、即ち、諸個人の諸欲求やそれらの満たし方に基づく諸関係(性、分業、交換)、直接あるいは間接の交通における他の全ての個人の発展、他方、歴史的には先代において達成され蓄積された生産諸力と交通諸形態といった、総じて外からの作動が、彼にその都度許す限りの「一面的な不具な発展」⁽¹⁵⁾の成果であるにすぎない、そしてそれをシュティルナーは、「唯一者」という意識の表象によつて神聖化しているのだ、と。「唯一者」というのが、社会的諸関係を捨象して抽出された人間存在であることが指摘されているのである。

マルクス、エンゲルスは唯一者を、社会的諸関係の動態性や歴史発展の不均質という現実の渦中であつて、それらの産物たる偶然性を最も生々しく体現しているものであるとみなしている。彼らがシュティルナーを批判するのは、その偶然性を生み出す関係の動態性が、「唯一者」もしくは「エゴイスト」の名のもとに、歴史₁内、社会₁内のある一点において凝結され、それが「唯一者」という同一性原理の内容とされてしまふと考へてのことなのであつた。この場合唯一者は、マルクス、エンゲルスによつて、昨今の最も発達した歴史段階、即ち最も広範なものとなつた分業の結果成立をみたグローバルな規模での普遍的交換関係において、それに対応して觀念的に得られた抽象的個人像が、哲學的表現としてカテゴライズされたものと解されて⁽¹³⁾いるのである。

ところで、マルクス、エンゲルスが右の二点のように批判するとき、彼らの念頭には、かかる歴史的偶然性とは別物の、真実に個人の個性の全面的發揮と呼ばれうるものが前提されていることに注意されるべきである。彼らは唯一者の唯一性を単に階級的個人の生活条件そのものであるにすぎないと処理する一方で、その逆に、そのような制約を一切蒙ることのない普遍的な人格的個人としての生活が全うされる状態への展望を用意している。それが彼らの目指す「共産主義」社会である。

「共産主義は従来のあらゆる生産諸関係ならびに交通諸関係の基礎を覆し、一切の自然生的な諸前提をはじめ意識的に、従来の人間たちの造出物として取り扱い、その自然生的性格の化けの皮をひんむいて、結合せる諸個人の威力に服属させる⁽¹⁴⁾」。

この来るべき革命は、彼らによれば、従来の革命とは違ふという。なぜならそれは、大工業の成立以来、世界的規模に普遍化した分業と交換に対応して驚異的な発展を遂げた今日の交通と生産諸力にとって、いまや桎梏と化している私

的所有と分業そのものの廃止を目指すからである。共産主義は、分業の止揚によって一切の人格的諸関係の物象化と自
立化の原因そのものを根絶するのであるから、あらゆる政治的諸制度のまさに最終的で決定的な除去なのである。⁽¹³⁾ 共産
主義においてはしたがって、自己活動する個人が諸関係のみせる離在的で自生的な外観に惑わされ、それに倒錯的に隷
属させられるというような事態は生ずるはずがない。以上のことは、目下のところ一切の自己活動から完全に排除され
ているプロレタリアートが結合し、従来の生産様式と交通様式ならびに社会的編制の威力を打倒すること（革命）、お
よび生産総力を領有することによってのみ完遂されうる。そしてその結果、これまでに人格的個人の全面的な個性の発
揮を歪めてきた一切の自然生的なものは根源より一掃され、人々には、真の自己活動が保障されるであろう。このよう
に説かれるのである。

マルクス、エンゲルスの前述の二点にまとめられる唯一者への批判は、彼らが上のように真実に個人の個性の全面的
發揮が可能な段階であると信じて疑わない《共産主義社会》を、正当性の絶対的基準として用いつつなされている点に
注意されるべきである。

第二項 シュティルナー批判の問題点

前項に要約されたマルクス、エンゲルスの唯一者批判自体にみられる難点や、批判の背後にひかえるマルクス、エン
ゲルスの基本的立場における特徴、問題点などを探ってみよう。

【第一の問題点】

周知の通り、「史的唯物論」によると、個人は、本源的に歴史的・社会的関係によって終始不斷に規定されざるをえ

ないものだとされる。したがって、社会内個人には一人格としてのオリジナルな統一性は否定される。マルクス、エンゲルスによると、社会構造内に生活する人間は、ほとんど自明と化した特有の習慣によって自己意識に至るまで規定されてしまっているので、自力で解放されるような本来的自己などありえないと断ぜられる。彼らは、「私」として自明化される個人としての意識作用それ自体に批判的分析のメスをいれ、肉体的個人としての生存諸条件はもとより、自らを自由で自立的かつ自発的な主体として措定するその意識までもが、本源的に歴史的ならびに社会的諸関係——言語と同様に他者との交通の欲求とその必需性——によって不断に規定されることを免れないと論じている。人間存在ならびにその意識はこうして間主體的な産物として捉えられるが、その際関係の項として現出する「主体」は決して唯名論的に説明されるのではなく、あくまでも関係態が取り結ぶ結節点の呼称であるにすぎない、というのである。⁽¹⁵⁶⁾かくて唯一者もマルクス、エンゲルスらによって、社会的諸関係に還元され、その固有性の主張も、恒常的な差異への分散過程の一コマとして位置づけられる。

だが、厳密に言えば、個人存在というものは、以上のように単に特殊性としてのみ一次元的に評価されるべきものではない。柄谷行人も指摘するように、マルクスが『ド・イデ』において、もはや類々共同体図式によらず社会的諸関係（とりわけ交換）を前提とする以上、交換される諸事物において、その交換関係の体系の中に内面化されえぬある外部性（売れなかつた商品であるとか、交換価値において他のものと等置されなかつた「違う」労働など）のモメントの存在もまた認めざるを得ないはずである。この外部性とは、一般（全体性）を表现出する特殊性とはもはやイコールではなく、特性記述をどれほど積み重ねても指し示されない・微分不可能な「単独性」である。⁽¹⁵⁶⁾シュティルナーの唯一者とは、概念化されず、言述されず、一般化もされない、胸中で考えられた（この私）であった。それゆえ唯一者は、まさしくこの「単独性」に該当するのである。

「単独性」は、社会的諸関係を想定する場合不可欠なモメントであるにも拘らず、右に示された性質上、交換関係の地平には浮上してくるものではない。マルクスらの唯一者攻撃における不当な点は、その交換の地平に現れぬがゆえに——そしてその限りで——、唯一者によつて示される人間存在の「単独性」を看過するところにこそ存する。マルクスらは、主体的個人なるものは、現存しそのうちに絶えず矛盾をはらむ社会的諸関係の動態の中で、恒常的な差異への分散過程のうちに見えかくれする統一性の幻想であると断じるが、それによつて彼らは、体系的關係に内面化されない外部性としての唯一者——そしてその「反逆」——を、ブルジョア体制内の産物として否定しえたわけでは全くないのである。

唯一者||単独性は微分不可能であり、一般性(あるいは先例、慣習、規則)を表出するものではない。したがつてそれは、同一性の構造をもち、自己内關係として展開するヘーゲルのな世界史の段階的プロセスのうちに位置づけられるべきものでもない。つまり唯一者を、何らかの目的論的な歴史哲学やヘーゲルの「精神」の視角から相対化することは大きな誤りだということになる。しかるに『ド・イデア』のマルクス、エンゲルスは、その誤りを敢行しているのではないかと疑いもたれる。彼らが唯一者を否定し「史的唯物論」の視点といえども、自己自身に關係し自立する何らかの主体的「存在」に支えられて成り立っているのではないのか。そもそも、社会内個人はあくまでも關係の項であり、當の關係の総体を超出できないというならば、なぜマルクスらはブルジョア体制の渦中であつて当該体制を断罪できるのであろうか、という素朴な疑問が湧いてくる。ブルジョア諸關係の結節点として、意識も思考も制約されているはずの人間の個人が、当該状態を共產主義の前段階として相対化しうるためには、自己内反省が可能な、それ自体完結し自立した主体的存在に依存し、それを基準とせざるを得ぬはずである。さらに踏み込んでいえば、それは歴史を貫いて自己を完成させる、ヘーゲル的な絶対精神なのではないか。この見通しは、後述の【第三の問題点】に関わる。

【第一の問題点】

マルクス、エンゲルスは、唯一者がそれによって規定されつくしているとする現下のブルジョア諸関係の病理性的分析には執拗なほどに熱心であり、また悲観的でもあるが、それに比較すれば、彼らの歴史哲学のゴールである共産主義以降の社会への展望は、逆に驚くほどに抽象的でありまた楽観的である。⁽¹⁵⁹⁾ そればかりでなく彼らはシュティルナーに向かい、共産主義以降の社会にはいかなる政治的的制度も生じない、という。彼らはこのように、共産主義のゆく末にいかなる懸念も危惧も抱くことはない。

しかしこのように、「一切の自然生的な諸前提をはじめて意識的に、従来の人間たちの造出物として取り扱」うことによつて、それ以降、人格的個人の完全な自己發揮を阻むあらゆる自然生的なものが一掃されるということがこれほどまでも確信をもつて見込まれるのはなぜか。それは、彼らの歴史的な生産諸関係を導いてきた「見えざる手」、つまり明言されはせぬものの明らかに抱懐されていたであろう一種の目的論的な歴史哲学という裏づけをもてばこそその話である。⁽¹⁶⁰⁾ そもそもマルクス、エンゲルスの思想は、社会分析とその批判のための理論であると共に実践的な革命哲学でもあるのだが、後者としてみた場合、共産主義表現の先に生じうる「完全に解放された人間」の視点から、いわゆる《前史》としての資本主義段階が断罪されている。しかしそのようなことは、目的論的な歴史哲学の全体的整合性に具体的な時代の特徴や多様な現象、そして諸個人を統合させる見方であり、特殊性の全体性への統合要求である。

マルクス、エンゲルスは、因果論では説明しつくされない現実に対する歴史哲学、換言すれば学知への信頼が、あまりに過剰であると思われる。

【第三の問題点】

マルクス、エンゲルスの歴史哲学によれば、歴史は、真の自由が実現される段階に向かつてあと一步を踏み出しさえ

すればよい。というのも、大工業成立以来、貨幣制度の確立と競争の普遍化によってグローバルなものになった分業と交換に支えられ、未曾有の発展を遂げた今日の生産力は、いまや硬直化した偶然性の支配であるブルジョア的交通形態、とりわけ私的所有とのあつれきを生じはじめているからである。彼らは従来の歴史より、日々刻々と進展してゆく生産力と物象化した交通諸形態との矛盾が、その都度革命を惹起せしめてきたことを学び知っていた。そして資本制の熟した今もまた、革命勃発のためには十分な客観的条件が成立しつつあるのであると認められるのである。

しかし革命の実現そのものは、現実には、単に理論的に思い描かれた歴史の法則のみによってもたらされることはできない。思想の実践としては、マルクス、エンゲルスといえども共産主義革命を歴史的必然として認識する個人の能力あるいは資質を前提せざるをえない。そして、その担い手はやはり現実の社会内個人であるより他はないのである。たとえそれが、史的唯物論の横軸と共産主義を預言的に待望する歴史哲学の縦軸との間の座標点にまで縮減されたものであるにすぎないとしても。

もちろんこの場合、《無知な》群衆を一定の方向に差し向けるのは、旧来の観念論的な「公民たれ」、あるいは「理性的たれ」といった類の定言命法ではない。マルクス、エンゲルスにおいて現在地点ではいまだに《完全な人間》たりえていない大衆を正しい方向に導くのは、生産力と交通形態との相互作用が織りなす生産関係に、歴史的変容をもたらす必然性なのである。マルクス、エンゲルスによれば、現存諸関係内にある諸個人が現体制に対して牙をむくのは、彼らの自発的な即目的反抗によってでなく、あくまで「生産力および交通形態が非常に発達した」ことによるのだとされる。私有と分業を廃棄する主体は、彼らによれば「一定の歴史的な発展段階における個人たちであって、決して任意の偶然的な個人たちではない」⁽¹⁰²⁾。マルクス、エンゲルスの革命理論ではこのように、歴史の必然性に召命されて動く個人が念頭におかれているのであって、この点にも彼らの因果論への固執ぶり、それゆえにまたロゴス優越視的な性格が窺われ

る。このような視点からは、日常生活の中で自然発生する庶民の素朴な怒りなどの反作用は一切評価の対象外におかれる。むしろ大衆の中から自然発生的に沸き上がって来る指導者や秩序のない反抗運動に対する《学識者》の冷やかな視点が、そこに垣間みられもする。

以上を総じていえば、マルクス、エンゲルスは原因としての唯一の真理に導かれて概念主義的な思考によって共産主義革命を樂觀し、しかもそれを、発生的で多様な現実問題を処理するために確実に有効な処方箋として絶対視しているのであり、その点にこそ議論の陥穽が存するのである。

第三項 マルクス、エンゲルスに対するシュティルナーの立場

いわば『唯一者』の登場によつて、前三月期の民衆に向かつて次の二通りの選択肢——即ち過渡期に採られるべき道として《疎外の根源的止揚》という歴史的使命を担う主体たるか、それとも個体としての自己の全実存をかけて硬直した体制を打破するか——が呈され、選択が求められたのだといえよう。そのように理解したマルクス、エンゲルスは、『唯一者』が、さしあたりは時事評論として巷間に及ぼすであろう効果を懸念し、同書によつてなされた自らに対するいわれなき誹謗と共に同書を、実証性をまるで欠いた、歴史を眼中にいれぬ展望なき扇動であると非難した。かようにして『聖マルクス』では、シュティルナーを史的唯物論という《実証的で実在的な》基準にかけ、唯一者を、予定される将来の共産主義革命のために必然的に克服されざるをえないブルジョアの意識諸形態の具象化として位置づけ、それへの全面的な論破を重ねゆく過程で総論に凝縮された彼らの自説を変装曲的に展開していこうとする意図が貫かれることになるのである。このようなマルクス、エンゲルスの『唯一者』に対する逐字的批判が分量的には当然の『唯一者』自体を上回るものであり、しかも一方的なものであることもあって、『唯一者』を直接読まない人々

に対して「個の即自的反逆」というシュテイルナーの議論が与える印象は、大幅にマルクス、エンゲルスの固有の関心の枠内に限定づけられ、歪められたものたるにとどまっていることは否めない。⁽¹⁰⁾

しかし、マルクス、エンゲルスの批判と異なり、シュテイルナーの唯一者とそれの反逆の提議は、前項にも示されたように、「保守的なブチブル・イデオログ」と呼ばれるようなものでは決してない。そもそもシュテイルナーの議論全体を通して、ブルジョア体制を擁護しようとする意図はない。シュテイルナーは反批判の中で、次のように述べている。やや長いが、引用してみよう。

「人々は一体なぜ競争しようとしたのか。それは、競争は誰にとっても有益であると思われたからである。それではなぜ、社会主義者たちは今になってそれをやめようとするのか。それは、競争が期待された利益を保障せず、ほとんどの人々の暮し向きが悪くなり、各人が各々の境遇を改善することを望み、その目的のためには競争を廃止した方がよいと判断したからである。こういう場合、エゴイズムは果たして競争の「根本原理」なのだろうか。あるいはエゴイストたちは、逆に競争を誤算しなかったのだろうか。彼らはまさに自己のエゴイズムを満足させられなからこそ競争を捨てる必要に迫られないのだろうか。

人々が競争を導入したのは、それに万人の福祉を期待し、その競争について意見が一致し、競争を共に試すためであった。孤立や個別化を生む競争は、一体化、合意、共通の確信の産物でさえあって、人々は競争によって個別化されたのみならず、同時に結合されたのである」(KSTN)。

以上のシュテイルナーの言には、さらなる議論発展の可能性が潜んでいる。彼のいう「合意」や「一致」がフィクションであることには疑う余地はないが、「合意」を、「作法」と「内容」⁽¹⁰⁾とに区別し、エゴイストの合意を前者に限定しようとしている節が窺える。もちろん右の引用のみでは、合意「作法」の理論としては練り上げられたものとはおよそ

いい難いが、いかなる性質とも両立しうる「粹」的性質をもち、かつ合意された社会とはいえ自分の利益に反する結果となつたときには脱退できる自由を保障されているなどの構想は、ノージックのコミュニティー論にも通ずるものといえよう。ブルジョアの社会関係特有の矛盾や歪が耐え難いものになれば、唯一者はそこから脱退するか、あるいは唯一者同士の取り決めでそれを廃止するがよい、とまで述べているのであり、この限りではマルクス、エンゲルスの主張と両立しないわけではない。

マルクス、エンゲルスに対するシュティルナーの重要な相違は、前者による批判が、人間に《非人間化》を強いるブルジョア諸関係という特定の体制に向けられているのに比べ、後者の場合、批判は特定内容の体制を対象とするのではなく、いかなる体制であれそれが多様性を消去し等質的に捉える場合には、絶えずそれへと向けられるという点にある。唯一者とは、前節で示されたように前言語・前意識的な境位から見据えられた自我の生成史に立脚し、概念的把握が及び得ない生身の人間の生の非合理的・カオス的な側面からも主張するものである。だから唯一者は、いかなる体制であれ「理性」に正當づけられ真理への統合に固執するもの、またかかる傾向を硬直化させるものに対して、理性的な部分に限定されない個人的生の全事実（無意識、前言語的・感性的カオスも含めて）から絶えず異議を唱え（反逆）、その硬直化を阻むと同時に、絶えず制度に活性化の糸口を与える機能をもつ。したがって、それはマルクス、エンゲルスが考えるように共産主義の革命の敵でもなければ、観念論哲学の致命的な限界を露呈させるような単なる社会変革の一戦略のサンプルにとどまるものではない。

マルクス、エンゲルスにとって唯一者やその反逆の議論が許しがたいものである理由は、唯一者による異義申立てが、歴史における理性に服しない感性、即ち必ずしも共産主義革命を必然的に志向するための基礎として作用しない感性に基づいているという点にこそあった。『経哲』における感性についての考察にもみられたように、マルクスは当時の感

性主義が喧伝された時代にあつて「人間らしく」、即ち人間の全面的解放（＝共產主義）を目指すべく洗練される以前の即自的感性、いふなれば自生的な感性というものに決して信をおかなかつた。⁽¹⁶⁵⁾かような感性論は、社会批判の方法論としては疎外論を放棄した上に成り立つた『ドイツ・イデオロギー』に至つても、引き続きマルクス、エンゲルスの立論に重要な作用を及ぼしている。たとえば彼らは、シュテイルナーのいう、自己解放を目指す唯一者が立脚する「私」の「単独性」、そしてそれに基づく「反逆」の意義を皆目承認せず、それを「個人が現存の諸関係によつて肉体的・知的、そして社会的に陥つているところの不具化と隷属化」、「個人に」歴史的に特定地点の社会体制がおしつけた「偶然性」以外の何物でもない」と一蹴している。このように彼らが現存諸関係の内側に生きる個人の《今、この時点》における欲望など諸々の感性的発現を、全て「不具化・隷属化」の外観としてしか評価することができないという点にこそ、彼らの、無媒介・無秩序な自生的感性の歴史目的による統合化への欲求を窺いしることが出来る。

だがシュテイルナーは、このようにマルクス、エンゲルスの理性主義の立場にとつてはとるに足らぬと評価される、学知にかからぬ諸個人の即自的感性に発する反逆に、革命が陥りがちな全体化、画一化、等質化から生ける個人を救出す決定的な機能を見いだしていたのである。しかしこれらのは、マルクス、エンゲルスの言語＝意識に一元化された思考にとつては、革命という正しい方向に進みゆく歴史法則の実践にとつての単なる障害物もしくは雑音でしかないであらう。

ちなみに、『ドイツ・イデオロギー』から敷衍される意識的・有意的革命理論には、より露骨に大衆不信の特徴が濃厚である。レーニンによるローザ・ルクセンブルクへの批判はいまやその古典的一例であるが、近年の議論によつても、真に反体制的思想を確立するにはパラダイム・チェンジを要するのであるから、物象化された当該社会体制の内部で現実に生活している人々が、いかなる指導や教示もなしにこの体制に外在的・批判的な視座にたつことはきわめて困難

であり、さしあたっては「極く少数の『先覚者』」の存在が不可欠である旨が説かれる。⁽¹⁷⁾ 前衛が立脚するあらたなパラダイムの視点からすれば、打倒さるべき旧来の価値観は科学的学識が裏づける歴史の新段階に適しないという意味で、非合理的なものであり、それにとらわれている未啓発な大衆はやはり「非合理的」な、単に無秩序にエモーショナルなものとしか映らない。我々はここに、かの精神―物質の主―奴的関係が、科学Ⅱ理性という精神的領域による感性Ⅱ大衆の支配、より具体的にいえばボルシェヴィズムによる大衆アナキズムへの支配という形をとって再生されている事態を見いだすことも可能であろう。⁽¹⁸⁾

反逆は無方向的であり、社会変革の手段としては適切ではない、とシュティルナーの反逆論を棄却するマルクス、エンゲルスの視座においては、明らかに唯一者思想は、科学の後見を要する無秩序な即自的感性の騒乱の一コマとして位置づけられている。しかしプラトン以来ヨーロッパ政治哲学に特徴的な、選良の指導的理性による多様性の均質化とそれらの全体的統合化への憧憬が、以上にみられたようにマルクス、エンゲルスの革命理論にさえその影を落としているからには、シュティルナーがアナキスティックな個別的感性の多様性の場に敢えて踏みとどまり、「唯一性」「反逆」「無概念」等のスローガンのもとにかかる立場を積極的に顕揚することの意義に、より多くのそして真剣な着目がなされてよいはずである。シュティルナーによって論じられる、言表も概念化もされない唯一者のその都度一度きりの感性と経験、ならびにそれを発起点とする反逆、これらが画一的全体化の要となる理性や現代科学の自己充足性に果してどれ程まで風穴をあけることができるのか、このような関心から我々はシュティルナーを新たに評価することができるのである。

以上のように考察したうえで改めて双方の対立を見直すならば、唯一者の反逆の議論は、マルクス、エンゲルスの、史的唯物論を通して構成された生産的人間の進歩史観に、鋭い異議をさしはさむものであるということが明らかになる。

つまり唯一者の発想は、歴史的必然性をつかむ学知に裏づけられた人間の進歩史観の首尾一貫性や整合性、そしてこの議論に基づく現実支配を攻撃する機能を果たすのである。さしあたりの結論として、双方の暫定的比較の素描を試みるならば、マルクス、エンゲルスの立場とは、歴史哲学に予定されない、大衆から自然発生的に沸き起こってくる反逆運動に対して、歴史の必然という〈真理〉を知る〈学識者〉の視点から冷やかで不信にみちた視線を投げかけるものであるのに比べ、シュティルナーの立場とは、概念的思考や実体的真理の知には把握されない生身の個人の生の事実全体から、歴史の必然として確信され遂行されようとする社会変革の自己完結性に異議を申し立てるものである、と特徴づけることができる。

第三款 時代的背景

「聖マックス」にみられる、かの冗長で執拗なまでのシュティルナー潰しに、マルクス、エンゲルスを駆り立てたものは一体何であったのか。

マルクス、エンゲルスとシュティルナーとは互いに、それほど離れた地点にたつわけではない。唯物論的ではあっても現実の社会的関係を視野に入れぬフォイエルバッハの「感性的人間」、やはり精神主義的であるにとどまるB・パウアーの「批判的人間」、これらいずれをも、具体的現実に立脚する生身の人間存在にたちかえって克服しようとする關心の点では、シュティルナーもマルクス、エンゲルスも軌を一にする。しかしマルクス、エンゲルスは現実的人間を病理的なブルジョア社会、とりわけ分業と交通の規定性を介してはじめて捉えるのであり、その止揚としての共産主義の先にこそ人間の全的自由が可能となる普遍的交通の成立を展望していた。ゆえにその一步手前の、現下の現実性にあ

くまでも踏みとどまって、個体の感性的経験と思考のみを頼りとする唯一者の反逆に現状打破の活路を見いだすシュティルナーの主張は、彼らの革命理論の死命を制しかねない有力な異議であった。事実、ブルジョア社会関係特有の矛盾が堪えがたいものとなりつつあるという実感が、大衆の日常的意識において現存諸関係そのものの歴史、必然的破綻(ゆえに革命を要する)という認識に直ちに結び付かない限りは、シュティルナーの説く即自的な個の反逆の方がマルクス、エンゲルスの議論に比べてより説得力をもち、また魅力的に映ずるであろうことは想像に難くなく、またそれはなにより、当人たち自身が十分に危惧していたことであるに相違なかった。

前三月期のドイツ社会に、確かに経済的困窮にあえぐ労働者の一群が存在したことは事実であるにもせよ、それはマルクス、エンゲルスが期待を寄せた、階級意識に目覚めたプロレタリアートといったものではまだなかった。その労働者階層を現に構成していた要素も多様であり、「自己の経済的自立性を維持することができずに没落した手工業親方、妻帯したためにツンフト手工業者から雇用されなくなった雇い職人、すでに一八世紀末以来マニユファクチュア経営のもとで職を得るようになっていた工場労働者、徒弟や雇職人から親方へと上昇する道を閉ざされていた手伝職人や日雇い職人、そして最後に、カール・マルクスのいわゆる「ルンペン・プロレタリアート」、即ち運が悪かったり、はじき出されたり、放浪癖があった人々、ぐれたり、意志が弱かったり、社会に適合できなかつた人々⁽¹⁰⁾」がそこに含まれていた。そしてさらに厳密にいうなら、当時は労働者階層とブルジョアジーの区別というものですら、流動的で不明瞭だったのである。正確には、上昇志向の有力な手工業者らと、競争に勝ち残る力をもたず自己の生計の維持に失敗し、単なる工場労働者へと転落してゆく雇職人らという対照的な傾向が、小市民層をひそかに階層分けしていたものといえる。のちに判然と明暗を分ける、一方に成金の工場主、他方に貧しい雇われ労働者、これら両者はそれゆえ前三月期には流動的な小市民階層としてその出自を同じくしていたのであり、この段階では両者間に真の階級闘争が成立しえなかつた

という事実も、それほど驚くべきことではなかつた。⁽¹¹⁾ 広範な勤労民衆は社会変革よりはむしろ「いまま少しのパン、いまま少しの権利、いまま少しの人間らしさ」⁽¹²⁾の方を切実に求めていたのであつた。

このような小市民層の中で、商才と金融上の幸運に恵まれたものは、競争に勝ち抜き、しばしば工場企業家へと身をたて、いわゆるブルジョアの仲間入りをする事ができた。彼らはしたがって、たえず社会的上昇への衝動をもち、自らの実力を發揮しうるチャンスの保障である営業の自由ないし政治的自由主義の強力な支持層であつた。マルクス、エングルスはこのような人々の気質とシュティルナーのエゴイズム論とを強引に結び付け、その議論を「ブルジョアになろうとしている今日のドイツ小市民の表現である」⁽¹³⁾と評している。しかしシュティルナーの議論の社会的射程は、すでに強調されてきたように、そのような次元のものではない。確かにシュティルナーは、営業の自由を呪詛する無力な勤労大衆のツンフト（場合によっては社会主義的な）志向をも寄せ付けないが、だからといって現状のままの営業の自由、そして自由競争を無条件に支持するわけでもない。彼は現下の自由競争は、文字どおりの自由、即ち無制約ではないとみる。なぜならそれは、営業のための特許など「競争の資格、つまり要件を求めて駆け回る」ことであるにすぎず、やはりそれも民衆の国家権力への「憑かれ」の表れであるからである、「国家という市民的原理でいうところの支配者がおびただしい数の制約で梃づけているような競争が、果して『自由』であるといえるのか」⁽¹⁴⁾（BLSO, 下一六〇—一六一頁）。シュティルナーは、推奨されている自由の正体が、産業資本の保護育成をもくろむ国家によって捏造され、強行的に推進される階級的自由であるにすぎないことを看取し、その点を批判していたものといえる。⁽¹⁵⁾ シュティルナーは、かつしてブルジョア擁護的な自由主義者とみなされるべきではなく、むしろかかる階級偏向的自由をはねつけるラディカルな前国家的自由尊重主義者と理解されるべきである。⁽¹⁶⁾

ブルジョアの自由主義、そしてその不平等性の克服としての社会主義的解決、このいずれをも超克する第二の道とし

てシュティルナーは、個人の力に全面的に委ねられた擷取と利用の自由、つまり「互いを君らの資産の一部、『有用な主体』とみなす」エゴイスト的振舞いをうちだした。この立場は、前述された前三月期の、いまだ明確に階級意識もちえていない流動的な勤労者群の心情にとつては、疎外の根源的止揚という歴史的使命を説かれるより以上の食い付きの良さと言得力をもつものであったということが出来る。たとえばそれは、成金志願者には、自己のもてる能力あるいは資産(Vermögen)のかぎり仮借なく奪い取れと鼓舞する声でありえようし、また生計の危機にさらされている雇用労働者に対しては、自らの価値を引き上げ、その労働の値を上げよ(ストやサボタージュ)と呼びかける声でもあったのである。(vgl. EE299-302. 下一七四—一七七頁)。

第三節・註

- (12) MEGA3/1, S. 255.
- (13) Ebenda, S. 251-252.
- (14) Jeremy Bentham, Wilfrid Harrison (ed.), *A Fragment on Government and an Introduction to the Principles of Morals and Legislation* (Basil Blackwell Oxford, 1948), p. 146. 山下重一(訳)「道德および立法の諸原理序説」(中公バックス『世界の名著』三八)一〇八頁。平井俊顕・深貝保則(編)『市場社会の検証——スミスからケインズまで——』(ミネルヴァ書房、一九九三年)四九—七八頁参照。
- (15) 星野智「シュティルナーのヘーゲル左派批判」『理想』(一九七八年五月号)二〇九頁。
- (16) HSW2, S. 445-446. ヘーゲル全集『精神現象学』(下)八九三頁。
- (17) Ebenda, S. 255. 同前一一頁・廣松『地平』一八頁。
- (18) F. W. J. Schelling, Manfred Schröter (Hrsg.), *ders Werke*, (München), Bd. 6, S. 737. シェリングのヘーゲル批判については、

- Joseph L. Esposito, *Schelling's Idealism and Philosophy of Nature* (Associated Univ. Presses, 1977), pp. 178.
- (136) Max Adler, *Engels, als denker*, 2. Aufl., (J. H. W. Dietz Nachf. Berlin, 1925), S. 34.
- (137) 廣松・前掲書六一七頁。
- (138) MEGA3/1, S. 255.
- (139) 廣松・前掲書一六頁。
- (140) MEGA3/1, S. 259.
- (141) Hess, *Die letzten Philosophen*(Darmstadt, 1845), 山本耕一(訳)「最後の哲学者たち」『左派論叢』第一巻。
- (142) MEGA1/2, S. 326. 『経哲草稿』(岩波文庫) 一一頁。
- (143) Hess, "Über das Geldwesen", §1, §2, <ス・前掲書一一六一一八頁。
- (144) MEGA1/2, S. 369. 『経哲草稿』九五頁。
- (145) 廣松版『ド・イデ』一一頁。
- (146) MEGA3/2, S. 23-24.
- (147) Gustav Julius, *Der Streit der sichtbaren oder Kritik der Kritik der kritischen Kritik*, in: *Wigand's Vierteljahrsschrift*, Bd. 2 (Leipzig, 1845), S. 326-333. 村上俊介(訳)「可視的人間教会と不可視的人間教会の争い、または批判的批判の批判の批判」『左派論叢』第三巻。
- (148) B. Bauer, *Charakteristik Ludwig Feuerbachs*, in: *Wigand's Vierteljahrsschrift*, Bd. 3 (1845), 山口祐弘(訳)「ルードヴィッヒ・フォイエエルバッハの特性描写」同前所収。
- (149) Paterson, op. cit., p. 109.
- (150) *Deutsche Ideologie*, S. 457-458, マルリエン全集四巻四六八頁。
- (151) 廣松版『ド・イデ』四二頁。
- (152) Michael Ryan, *Marxism and Deconstruction. a Critical Articulation* (The Johns Hopkins Univ. Press, Baltimore and London 1982)の第二章参照。邦訳は今村仁司他(訳)『デリダとマルクス』(勁草書房、一九八五年)；花崎皇平『マルクスにおける科学と哲学』(社会思想社、一九七二年)七二一七四頁。

- (153) 廣松版『ド・イデ』一三四頁。
- (154) Deutsche Ideologie, S. 399, マル||エン全集四卷四〇七頁。
- (155) 廣松涉「物象化論の構制と射程」『思想』(一九八三年三月)をみよ。
- (156) 柄谷行人「ビューモアとしての唯物論」(筑摩書房、一九九三年)。
- (157) Deutsche Ideologie, S. 397, 同前四〇五—四〇六頁, ebenda, S. 401, 同前四〇九頁。
- (158) 加藤尚武「哲学の使命——ヘーゲル哲学の精神と世界——」(未來社、一九九二年)一〇七頁
- (159) 資本主義のもとでは真の個性發揮など望むべくもないが、共產主義が実現されればそれは可能になる、と論じていると解釈される。Thomas, Karl Marx and the Anarchists, p. 152.
- (160) Allen Wood, Karl Marx (Routledge and Kegan Paul, 1981), p. 210.
- (161) 城塚登||廣松涉||清水多吉三者会談「マルクス主義の思想的核——マルクスのマルクス主義をめぐって」『理想』(一九七七年九月号)の中の、次のような城塚氏の発言が興味深い、「マルクスの思想的核心ということになると、僕は二重構造みたいなものを考えているのです。その核心の根底をなすものは『人間の人的解放』という方向づけだった。これはイデオロギオッシュな側面だということもできる……。だが、∴現実把握の仕方がヴィッセンシャフトリッヒだといえる。ただし僕がいう場合のヴィッセンシャフトリッヒは、∴は二重構造をなして、人間解放の方向づけを根底にもっていると思うんです」。
- (162) Vgl. Deutsche Ideologie, S. 406, マル||エン全集四卷四一五頁。
- (163) いまなお、そのようなマルクス、エンゲルス寄りのシュティルナー理解は根強い。たとえば Jürgen Maruhn, Die Kritik an der Stirnerschen Ideologie im Werk von Karl Marx und Friedrich Engels (R. G. Fischer Verlag, 1982), S. 124.
- (164) 桂木隆夫「二つの合意」『創文』三三三六号(一九九二年、創文社) 参照。
- (165) マルクスは確かにフォイエールバッハにならない、自然を精神の自己実現過程にとりこむヘーゲルの自然観 (Egeli, Enzyklopädie, §244.) に反対し、人間の自然による被制約性としての感性や受苦性の復権を訴えたが、反面で、ヘーゲルの主体の自己産出論(『精神現象学』における)を受け入れ(『経哲』)、人間は本来自然を対象とする労働(歴史貫通的労働)において自己の生命を發現する主体であるとも想定していた。そして、このような本来の労働すなわち自然—人間の望ま

しい物質代謝がうまく機能しない社会構造として、ブルジョア社会を批判したのである。マルクスによれば、人間は、人間—自然間の物質代謝関係を自らの行為によって媒介・規制・制御することによって望ましいあり方（人間の全面的発展—共産主義）に向けて創出していかねばならない (MEGA2/5, S. 129)。

したがって、マルクスにとって人間が感性的・受苦的であるという前提は、人間の以上のような共産主義社会の実現をめざすべき歴史的使命に適合的なものであらざるをえない。このような視点からマルクスは媒介されない無秩序な即自的感性をしりぞけ、「社会的人間の諸感覚は、非社会的人間のそれとは別の感覚なのである」 (MEGA1/2, S. 394, 『経哲』一三九頁) と述べたのである。なお、人間—自然間の正常な物質代謝関係の創出として共産主義革命を展望する見方は、マルクスにおいては『フイエルバッハ・テーゼ』、『ド・イデ』以降『経済学批判要綱』、『資本論』、『ゴータ綱領批判』に至るまで変わらず貫かれていく。マルクスの自然観については、椎名重明「自然観からみたマルクス」、『別冊経済セミナー・マルクス死後一〇〇年』（一九八三年）、内田義彦『資本論の世界』（岩波新書）八六頁、Alfred Schmidt, Ben Fowkes (trans.), 『The Concept of Nature in Marx』 (NBL, 1971), pp. 78-80, 元浜清海（訳）『マルクスの自然観』（法政大学出版局）七七一—七九頁、森田桐郎「人間—自然関係とマルクス経済学」、『経済評論』六月臨時増刊号（一九七六年）四九—五〇頁。また、『要綱』における労働過程論と自然認識の関連を集中的に論じたものとして向井公敏「経済学批判体系と自然認識」、『大阪市大・経済学雑誌』第六五巻三号（一九七一年）、内山節『自然と人間の哲学』（岩波書店、一九八八年）など。

- (166) Deutsche Ideologie, S. 458, 全集四卷四六八頁。
- (167) 廣松・前掲論文二六頁。

- (168) 石井信男∥清真人∥後藤道夫∥古茂田宏『モダニズムとポストモダニズム——戦後マルクス主義思想の軌跡——』（青木書店、一九八八年）二五〇頁。

- (169) Eugène Fleischmann, "The Role of the Individual in Pre-Revolutionary Society.", in: Peleczynski, a. a. O., p. 227, 邦訳（下）一九六頁。

- (170) Stadelmann, a. a. O., S. 155, 邦訳二二三頁。
- (171) Ebenda, S. 157, 同前二二六頁。

- (172) Ebenda, S. 172-173, 同前三七頁。『唯一者』が発表された一八四四年の八月、ベルリンの多くのサラサ染工場で、賃上

げ目的の集団労働放棄が起こっているが、それは前三月期におこったことが確かめられている唯一のストライキであったとされる。川越修『ベルリン王都の時代——初期工業化——一八四八年革命——』（ミネルヴァ書房、一九八八年）七二頁。

(173) Deutsche Ideologie, S. 433. 全集四卷四四三頁。

(174) 現代的にいえば、たとえば特定業種の利害関係者集団がその独占的利益の維持を図るために新規参入を阻む手段とされるという理由から、免許制の廃止を訴えるM・フリードマンの議論に通ずるところがあるだろう。

(175) 営業の自由は、労働主体と労働手段とを切り離す商品所有権の自由を保障することによって、資本の本源的蓄積過程を媒介し、ひいては産業資本の保護・育成に大いに資するものであった。ただし一八四〇年代当時のプロイセンのようにブルジョア国家も初期の時点では、資本支配のもとへの労働主体と労働手段との集結がまだ資本主義的経済法則の自律的展開によって推進されるまでには至っておらず、旧体制の除去と重商主義をうたう国家によって強行的に保障されていたのである。藤田勇『近代の所有観と現代の所有問題』（日本評論社、一九八九年）参照。本文に示されたような、この点に着目してのシュティルナーの営業の自由批判は同時に、Börsenの立場から《私的所有》を階級国家によって捏造された虚構とみなす彼の所有権批判に並行するものである。

なお、当時のプロイセンでラディカルな改革を主張する人々は、むしろブルジョア的な社会関係の急速な浸透がもたらした諸矛盾を緩和する方策としてツンフトなど古い社会関係を見直す傾向にあった（森・前掲論文一五頁参照）、といわれるが、いかなるものであれ「特許」「要件」の全廃を要求するシュティルナーの立場は、いうまでもなくこのような傾向とも一線を画している。